

第3章 犯罪被害の不安感、リスク知覚の構造

この章では、犯罪被害の不安感、リスク知覚の分析を行う。調査票の間2～間9の回答結果をもとに、どのような人がどれほどの犯罪被害の不安感を抱き、リスクを知覚しているかをみていく。

1. 全般的犯罪被害の不安感

調査票の間2で、「あなたご自身が、日頃、犯罪の被害にあうのではないかと不安を感じることがありますか」とたずねた。回答は、「よくある」「たまにある」「ほとんどない」「全くない」の4件法である。

(1) 性別にみた犯罪被害の不安感

表Ⅲ-3-1は、犯罪被害の不安感を性別に示したものである。無回答を欠損値として集計対象から外し、統計的検定を行った。「よくある」という回答は男女とも6.2%であり、1割弱であった。「たまにある」は男性44.3%、女性50.2%で4割強から5割であった。「ほとんどない」は男性39.4%、女性35.4%で3割強から4割、「全くない」は男性10.0%、女性8.2%と1割弱であった。

4件法のままの分析では、男女で有意な違いはみられない。カイ二乗検定の結果、 $p=.08$ であった。

表Ⅲ-3-1 性別にみた犯罪被害の不安感 (%)

	よくある	たまにある	ほとんどない	全くない	合計
男性(n=857)	6.2	44.3	39.4	10.0	100.0
女性(n=915)	6.2	50.2	35.4	8.2	100.0
全体(n=1,772)	6.2	47.3	37.4	9.1	100.0

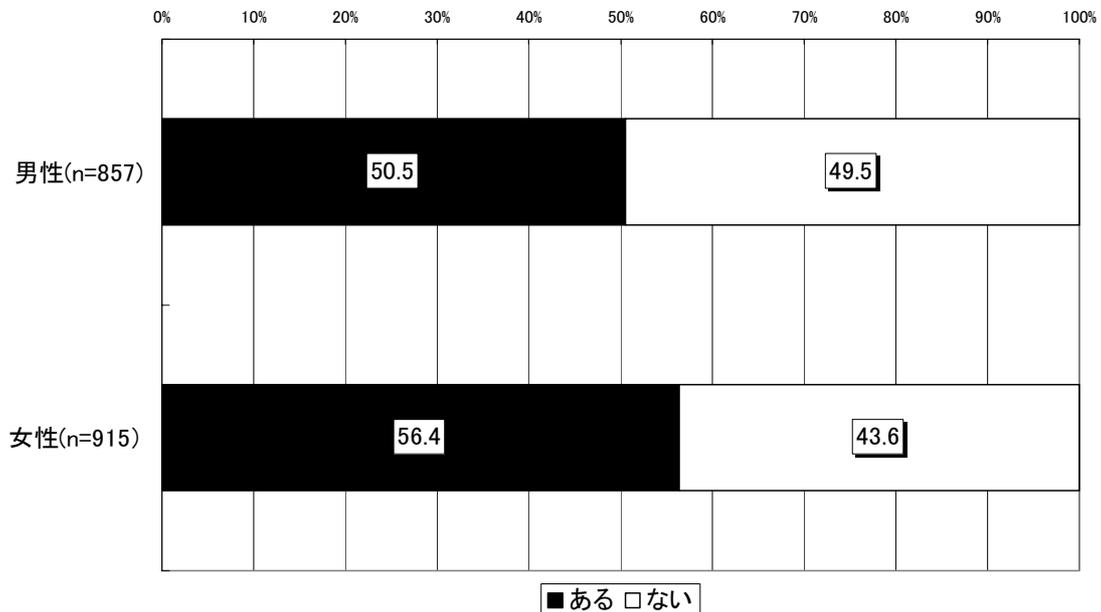
$p=.08$ n.s.

以下、「よくある」と「たまにある」という回答を統合し、犯罪被害の不安感が「ある」群とし、同様に「ほとんどない」と「全くない」という回答を統合し、「ない」群とし、2分割した集計を行う。図Ⅲ-3-1は、その結果を示したものである。

犯罪被害の不安感が「ある」という回答が男性では50.5%、女性では56.4%であった。

わずかながら、女性の方が犯罪被害の不安感が強い傾向がみられる。カイ二乗検定では、5%水準で有意な差がみられた。

図Ⅲ-3-1 性別にみた犯罪被害の不安感



$p < .05$

島田 (2004) は、日本版総合的社会調査 (JGSS) の第 1 回本調査、法務省法務総合研究所による第 4 回国際犯罪被害実態調査 (ICVS)、科学警察研究所犯罪行動科学部犯罪予防研究室による「地理情報システムを用いた身近な犯罪の効果的防止手法に関する研究」の 3 つの調査結果を比較検討している。犯罪被害のリスク知覚について、JGSS では「自宅から 1 キロ以内の夜の一人歩き危険な場所の存在」について尋ね、ICVS と科警研では近所での夜の一人歩きの安全性を尋ねている。

ここでの分析とは設問が異なるため、単純に比較するわけにはいかないが、いずれの調査においても女性は男性よりも有意に犯罪被害のリスク知覚がある者の比率が高かった。JGSS 調査ではリスク知覚あり群が男性 45%、女性 58% ($p < .01$)、ICVS 調査では男性 16%、女性 29%、科警研調査では男性 28%、女性 44%となっている。

これらの調査結果と同様に、本調査においても女性の犯罪被害の不安感は男性よりもやや強く、おおむね一貫した調査結果となっている。ただし、ここでの分析では男女の差はそれほど大きくはない。先行する 3 調査と異なり、全般的な犯罪被害の不安感をたずねているためであろう。

(2) 性別・年齢別にみた犯罪被害の不安感

表Ⅲ-3-2 は、性別・年齢別に犯罪被害の不安感を示したものである。この表から、年齢

と不安感に直線的な関連を見いだすことは困難である。

男性では、「よくある」という回答が 20 代で 0.6%とほとんどいない。70 歳以上では 10.7%と 1 割が「よくある」と回答している。ただし、70 歳以上では「全くない」という回答も 15.5%と全世代の中で最も多く、他の世代に比べて回答がばらつく傾向にある。

「たまにある」という回答に注目すると、30 代が 51.7%、40 代が 48.7%となっている。30～40 代では 5 割前後が「たまにある」と回答していることになり、他の世代が 4 割前後であることに比べ、やや不安感が強い傾向にある。カイ二乗検定の結果、男性では $p<.01$ で有意な差がみられた。

女性においても、年齢と不安感の間に直線的な関連を見いだすことは困難である。男性と同様、70 歳以上になると「全くない」という回答が他の世代より多く、16.4%となっている。「よくある」という回答はどの世代であっても 1 割に満たず、大きな違いはみられない。「たまにある」という回答もどの世代もおおむね 5 割前後であり、大きな違いはみられない。あえて指摘すれば 20 代と 40 代においてわずかに不安感が強い。カイ二乗検定の結果、女性では $p<.05$ で有意な差がみられるが、サンプルサイズが大きいため、参考程度とすべきであろう。

表Ⅲ-3-2 性別・年齢別にみた犯罪被害の不安感

(%)

	年齢	よくある	たまにある	ほとんどない	全くない	合計	人数 (人)
男性	20～29歳	0.6	41.3	43.9	14.2	100.0	155
	30～39歳	7.7	51.7	34.3	6.3	100.0	143
	40～49歳	8.0	48.7	37.3	6.0	100.0	150
	50～59歳	5.2	42.5	44.8	7.5	100.0	174
	60～69歳	6.8	41.7	38.6	12.9	100.0	132
	70歳以上	10.7	38.8	35.0	15.5	100.0	103
女性	20～29歳	7.5	54.1	31.5	6.8	100.0	146
	30～39歳	8.2	49.4	38.6	3.8	100.0	158
	40～49歳	5.8	54.5	36.4	3.2	100.0	154
	50～59歳	3.9	47.5	36.9	11.7	100.0	179
	60～69歳	5.8	48.6	38.4	7.2	100.0	138
	70歳以上	6.4	47.1	30.0	16.4	100.0	140

男性 $p<.01$

女性 $p<.05$

調査票の選択肢のまま 4 件法であると解釈が困難であるため、前項と同様に回答を統合

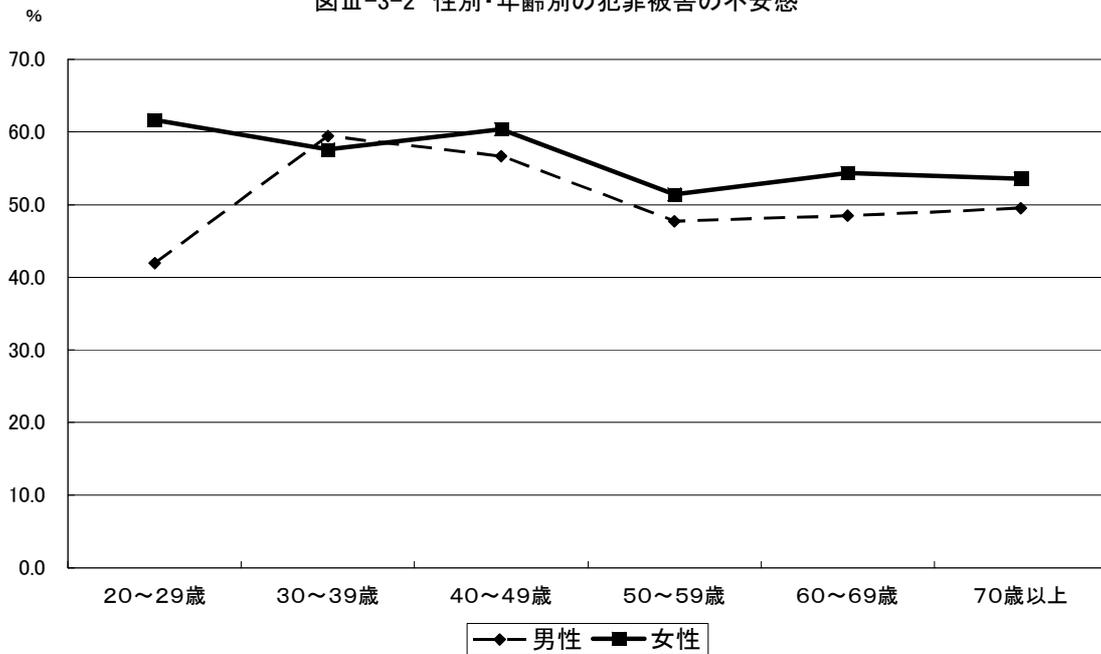
し、「よくある」と「たまにある」という回答を不安感が「ある」群とし、「ほとんどない」と「全くない」という回答を「ない」群とし、2分割した集計を行う。

表Ⅲ-3-3 性別・年齢別にみた犯罪被害の不安感(2群化)

		ある	ない	合計	人数(人)
男性	20～29歳	41.9	58.1	100.0	155
	30～39歳	59.4	40.6	100.0	143
	40～49歳	56.7	43.3	100.0	150
	50～59歳	47.7	52.3	100.0	174
	60～69歳	48.5	51.5	100.0	132
	70歳以上	49.5	50.5	100.0	103
女性	20～29歳	61.6	38.4	100.0	146
	30～39歳	57.6	42.4	100.0	158
	40～49歳	60.4	39.6	100.0	154
	50～59歳	51.4	48.6	100.0	179
	60～69歳	54.3	45.7	100.0	138
	70歳以上	53.6	46.4	100.0	140

男性 $p<.05$ 女性 n.s.

図Ⅲ-3-2 性別・年齢別の犯罪被害の不安感



表Ⅲ-3-3 は、性別・年齢別に犯罪被害の不安感を2分割した集計結果である。カイ二乗

検定の結果、男性では5%水準で有意な差がみられ、女性では $p=.39$ で有意な差はない。

男性の場合、20代では不安感が「ある」群が41.9%と最も弱く、30代で59.4%、40代で56.7%と6割弱で不安感が強くなり、50代以上になると5割弱と弱くなる傾向がみられる。

女性の場合は、男性と異なり20代の不安感が他の世代よりも強い。20代では61.6%に不安感がある。30代では57.6%、40代では60.4%と、20～40代の女性では6割前後に不安感がある。男性と同様、50代以上になると不安感は弱くなる傾向がみられる。50代51.4%、60代54.3%、70歳以上53.6%と不安感があるのは5割強となる。

図Ⅲ-3-2は、性別・年齢別に不安感が「ある」という回答比率を提示したものである。男女とも、30～40代の不安感が強く、50代以上では弱まる傾向がみてとれる。20代での男女の違いが大きく、20代女性は不安感が強いが、20代男性では不安感が弱いということがわかる。

前節で言及した島田（2004）においては「3調査とも共通して、30-39歳でのリスク知覚群が最も多くなり、年齢が増えるに従いリスク知覚群の割合が減少する傾向」が指摘されている。

ここでの全般的な犯罪被害の不安感の分析からは、30代の不安感が強いことは同様であるが、40代も同程度に高く、50代以降は弱まるが、それ以降の年齢の増加との関連はみられない、という結果であった。また、20代では男女の違いが大きいという知見がえられた。

(3)性別・婚姻状況別にみた犯罪被害の不安感

表Ⅲ-3-4 性別・婚姻状況別にみた犯罪被害の不安感 (%)

		よくあ る	たまに ある	ほとん どない	全くな い	合計	人 数 (人)
男性	未婚	1.7	43.6	39.8	14.9	100.0	181
	既婚（配偶者あり）	7.2	45.5	38.9	8.4	100.0	628
	既婚の経験あり	11.9	33.3	47.6	7.1	100.0	42
女性	未婚	9.2	49.2	33.1	8.5	100.0	130
	既婚（配偶者あり）	5.6	49.8	37.1	7.5	100.0	642
	既婚の経験あり	7.0	51.2	30.2	11.6	100.0	129

男性 $p<.01$ （ただしセルの16.7%が期待度数5未満） 女性 n.s.

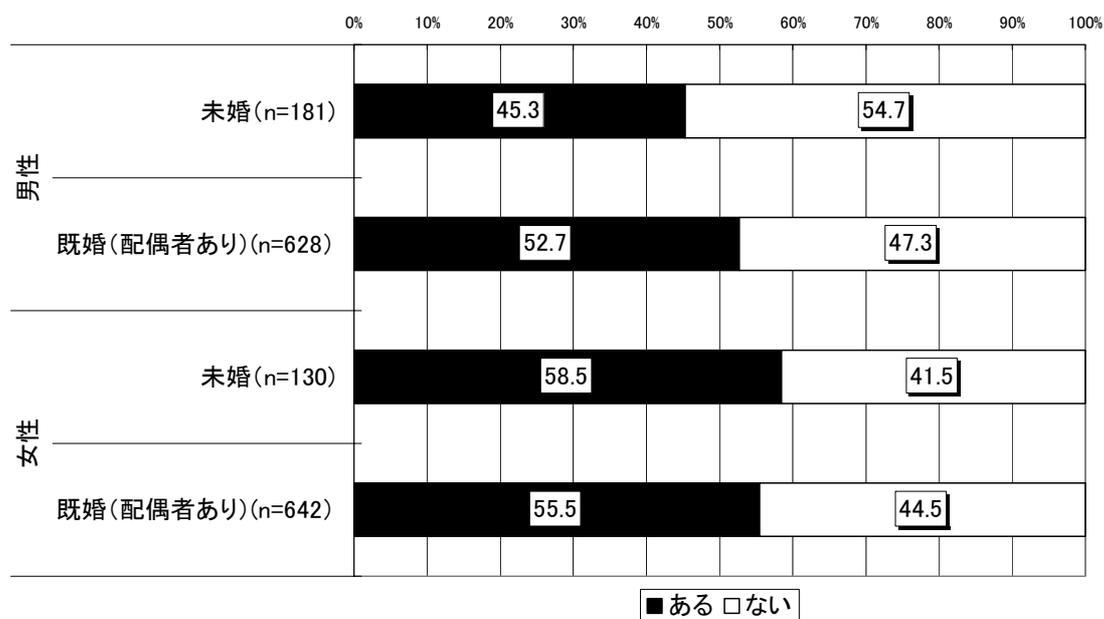
表Ⅲ-3-4は性別・婚姻状況別に犯罪被害の不安感を集計したものである。この表から性

別・婚姻状況と犯罪被害の不安感との関連をよみとることは難しい。男性では、「よくある」という回答に注目すると未婚 1.7%、既婚（配偶者あり） 7.2%、既婚の経験あり 11.9%となっている。また、「全くない」という回答に注目すると未婚 14.9%、既婚（配偶者あり） 8.4%、既婚の経験あり 7.1%となっており、未婚者よりも既婚者の方がわずかに不安感が強い傾向にある。カイ二乗検定の結果は 1%水準で有意な差ではある。ただし、「既婚の経験あり」の回答者が 42 人しかおらず、サンプル数として少ないため、参考程度に考えるべきである。

女性では、婚姻状況による違いはほとんどみられない。カイ二乗検定の結果でも、有意な差はみられない。

前項までの分析と同様、ここでも犯罪被害の不安感を「ある」「ない」に 2 分割し、かつサンプル数が少ない「既婚の経験あり」を集計対象から外した分析結果を示したものが図 III-3-3 である。

図 III-3-3 性別・婚姻状況別にみた犯罪被害の不安感



犯罪被害の不安感が「ある」という回答比率をみると、男性では未婚 45.3%、既婚（配偶者あり）で 52.7%となっている。既婚者の方がわずかに不安感が強いが、カイ二乗検定の結果 $p=.08$ で有意な差はなかった。

女性では未婚者 58.5%、既婚者 55.5%であり、ほとんど差はない。カイ二乗検定の結果も、 $p=.53$ で有意な差はなかった。

前述した島田（2004）はロジスティック回帰分析の結果、既婚未婚が犯罪リスク知覚に有意を有意に予測する変数であることを報告しているが、ここでの分析からは同様の結果は導き出せなかった。島田の分析は夜の一人歩きのリスク知覚を分析対象としていたが、ここでは全般的犯罪不安感を扱っているためであろう。

(4)性別・年齢別・婚姻状況別にみた犯罪被害の不安感

婚姻状況と年齢とがそれぞれ独立した要因として不安感に影響を及ぼしていることも考えられる。そこで、性別かつ年齢別かつ婚姻状況別に犯罪被害の不安感の有無を分析することとした。表Ⅲ-3-5はその結果を示したものである。ただし、40歳以上では未婚者が極端に少なくなり、分析に耐えられないため、集計対象から除外してある。

表Ⅲ-3-5 性別・年齢別・婚姻状況別にみた犯罪被害の不安感 (%)

			ある	ない	合計	人数(人)
男性	20～29 歳	未婚	39.6	60.4	100.0	111
		既婚(配偶者あり)	45.2	54.8	100.0	42
	30～39 歳	未婚	59.5	40.5	100.0	42
		既婚(配偶者あり)	58.3	41.7	100.0	96
女性	20～29 歳	未婚	58.1	41.9	100.0	93
		既婚(配偶者あり)	68.0	32.0	100.0	50
	30～39 歳	未婚	68.4	31.6	100.0	19
		既婚(配偶者あり)	55.7	44.3	100.0	131

男性 20代 n.s. 男性 30代 n.s. 女性 20代 n.s. 女性 30代 n.s.

不安感が「ある」という回答比率に注目していく。

男性 20代では未婚 39.6%、既婚(配偶者あり) 45.2%となっており、既婚者の方がわずかに強い。ただしカイ二乗検定の結果有意差はみられない。男性 30代では未婚者 59.5%、既婚(配偶者あり) 58.3%であり、ほとんど同程度である。

女性 20代では未婚 58.1%、既婚(配偶者あり) 68.0%となっており、既婚者の不安感がやや強い。ただし、統計的有意差はなかった。女性 30代では未婚 68.4%、既婚(配偶者あり) 55.7%となっており、20代とは逆に、未婚者の不安感がやや強い。ただし、統計的有意差はなかった。

女性において既婚未婚の効果が、20代と30代とで逆転しており、全般的な犯罪被害の不安感の分析において、既婚未婚のもつ意味について一貫した分析を困難なものとしている。

2. 同居家族が犯罪被害にあう不安感

調査票の間3で、「あなたみら同居の家族が、犯罪の被害にあうのではないかという不安を感じるがありますか」とたずねた。回答は、「よくある」「たまにある」「ほとんどな

い」「全くない」の4件法に加え、「家族はいない」という選択肢を加えてある。

この設問への無回答は男性 1.4% (12 人)、女性 16 人 (1.7%)、全体で 1.6% (28 人) いたが、これらのサンプルは欠損値とし、集計対象から除外して分析していく。また、「家族はいない」という回答が男性 2.6% (22 人)、女性 2.5% (23 人)、全体で 2.5% (45 人) いたが、これらのサンプルも同様に集計対象から除外する。

(1)性別にみた同居家族犯罪被害の不安感

表Ⅲ-3-6 性別にみた同居家族犯罪被害の不安感

	よくある	たまにある	ほとんどない	全くない	合計
男性 (n=826)	9.9	55.8	26.8	7.5	100.0
女性 (n=883)	9.4	56.6	26.5	7.5	100.0
全体 (n=1,709)	9.7	56.2	26.6	7.5	100.0

n.s.

表Ⅲ-3-6 は、同居の家族が犯罪被害にあう不安感を性別に示したものである。男女ともに「よくある」という回答が1割、「たまにある」が5割半、「ほとんどない」が3割弱、「全くない」が1割弱である。男女による違いは全くないとみてよい。カイ二乗検定の結果も、 $p=.98$ と、有意な差はない。

「よくある」と「たまにある」という回答を統合し、同居家族の犯罪被害の不安感が「ある」群とし、同様に「ほとんどない」と「全くない」という回答を統合し、「ない」群とし、2分割した集計を行うと、「ある」群が男性 65.7%、女性 66.0%となった。2分割した集計を行っても、性別による違いはみられない。カイ二乗検定の結果、 $p=.90$ となり有意差はない。

なお、前節で検討した自分自身の不安感は「ある」という回答が男性 50.5%、女性 56.4% と5割強の人が不安感をもっていたが、同居家族に関しては6割強となっており、自分自身の不安感よりも同居家族に関する不安感の方が強いことがわかる。

(2)性別・年齢別にみた同居家族犯罪被害の不安感

表Ⅲ-3-7 は、性別・年齢別に同居家族が犯罪被害にあう不安感を示したものである。なお、回答を統合し、「よくある」と「たまにある」を「ある」とし、「ほとんどない」と「全くない」という回答を「ない」としている。図Ⅲ-3-4 は、「ある」という回答の割合のみを示したものである。

「ある」という回答の割合をみていくと、男性では 20 代 55.8%、30 代 69.3%、40 代

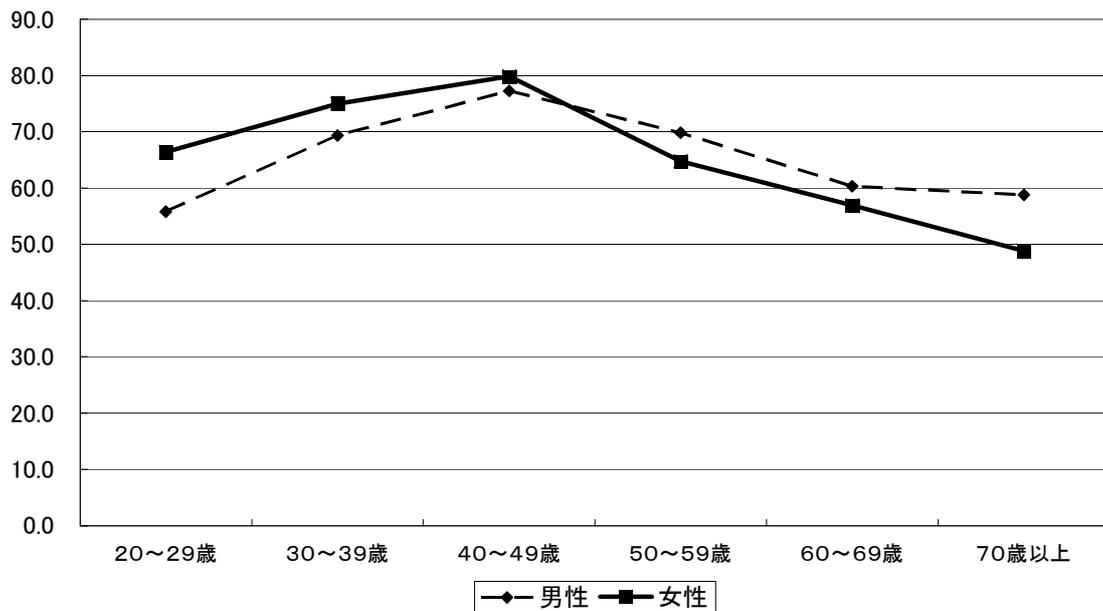
77.2%、50代 69.8%、60代 60.3%、70歳以上 58.8%となっている。

表Ⅲ-3-7 性別・年齢別にみた同居家族犯罪被害の不安感(%)

		ある	ない	合計	人数 (人)
男性	20～29歳	55.8	44.2	100.0	147
	30～39歳	69.3	30.7	100.0	137
	40～49歳	77.2	22.8	100.0	145
	50～59歳	69.8	30.2	100.0	169
	60～69歳	60.3	39.7	100.0	131
	70歳以上	58.8	41.2	100.0	97
女性	20～29歳	66.4	33.6	100.0	143
	30～39歳	75.0	25.0	100.0	156
	40～49歳	79.9	20.1	100.0	154
	50～59歳	64.7	35.3	100.0	173
	60～69歳	56.9	43.1	100.0	130
	70歳以上	48.8	51.2	100.0	127

男性 $p<.01$ 女性 $p<.001$

図Ⅲ-3-4 性別・年齢別にみた同居家族犯罪被害の不安感



20代から30代へと上昇していき、40代でピークとなり、それ以降徐々に下がっていく

ことがわかる。

女性では、20代 66.4%、30代 75.0%、40代 79.9%、50代 64.7%、60代 56.9%、70歳以上 48.8%となった。男性と同じように、20代から30代へと上昇していき、40代でピークとなり、それ以降徐々に下がっていくことがわかる。

20代30代といった若い時期には女性の方が不安感が強いが、50代をこすとわずかに男性の方の不安感が強くなる。また、自分自身の犯罪被害の不安感は50代以降もそれほどの減少を示さない（図Ⅲ-3-2）が、同居家族の犯罪被害不安感は加齢とともに減少していく傾向にあることがわかる。

男女ともに40代が同居家族の犯罪被害不安感が強く、8割弱の人が不安をもっている。

(3) 性別・婚姻状況別にみた同居家族犯罪被害の不安感

表Ⅲ-3-8は、性別・婚姻状況別に同居家族が犯罪被害にあう不安感について集計したものである。

男性では、既婚者の方が未婚者よりも不安感が強い傾向にある。「よくある」という回答に注目すると、未婚 3.7%、既婚（配偶者あり）11.2%、既婚の経験あり 17.6%となる。また、「たまにある」という回答をみると未婚 47.8%、既婚（配偶者あり）58.7%となり、10.9ポイント差がつく。また、「全くない」という回答をみると未婚 12.4%、既婚（配偶者あり）6.2%となっている。カイ二乗検定の結果は0.1%水準で有意な差である（ただしセルの16.7%が期待度数5未満）。

表Ⅲ-3-8 性別・婚姻状況別にみた同居家族犯罪被害の不安感 (%)

		よくある	たまにある	ほとんどない	全くない	合計	人数 (人)
男性	未婚	3.7	47.8	36.0	12.4	100.0	161
	既婚（配偶者あり）	11.2	58.7	23.8	6.2	100.0	625
	既婚の経験あり	17.6	47.1	35.3	0.0	100.0	34
女性	未婚	8.3	54.2	30.8	6.7	100.0	120
	既婚（配偶者あり）	9.7	58.1	25.9	6.3	100.0	640
	既婚の経験あり	10.0	50.9	24.5	14.5	100.0	110

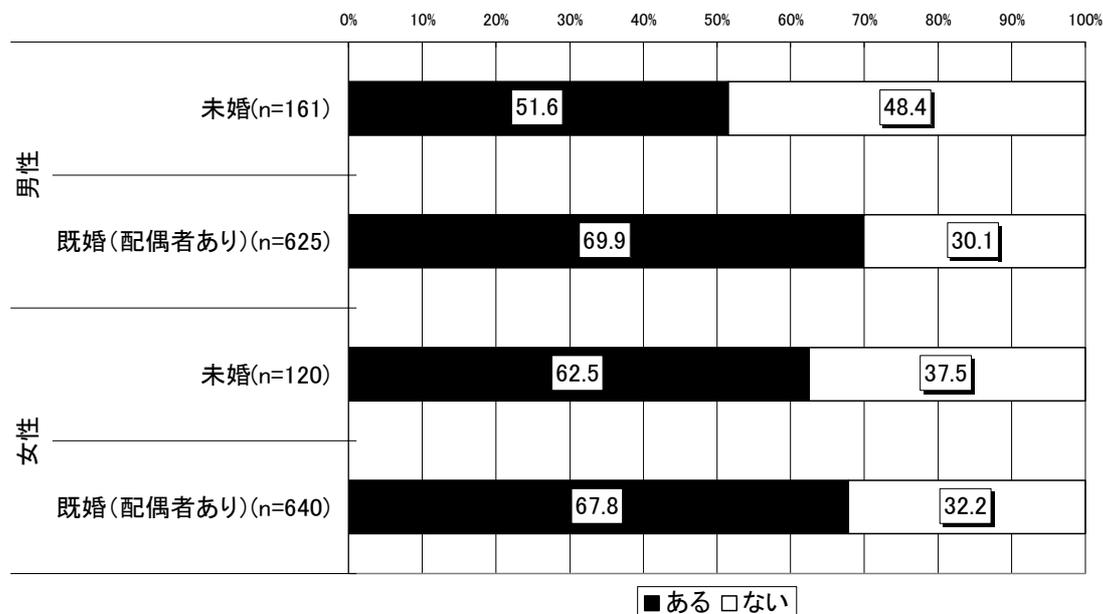
男性 $p < .001$ （ただしセルの16.7%が期待度数5未満） 女性 n.s.

女性では婚姻状況による違いがあまりみられない。「よくある」という回答は未婚 8.3%、既婚（配偶者あり）9.7%、既婚の経験あり 10.7%とどの群でも1割前後である。「たまにある」という回答をみると未婚 54.2%、既婚（配偶者あり）58.1%、既婚の経験あり 50.9%

と、既婚（配偶者あり）の女性の若干不安感が強いが、カイ二乗検定の結果は、有意な差はみられない。

男性の「既婚の経験あり」という回答者数が少ないため、これを集計対象から除き、かつ回答を統合して「ある」「ない」の2群にして集計した結果が図Ⅲ-3-5である。

図Ⅲ-3-5 性別・婚姻状況別にみた同居家族犯罪被害の不安感



男性 $p < .001$ 女性 n.s.

同居家族の犯罪被害の不安感が「ある」という回答をみると、男性では未婚 51.6%、既婚（配偶者あり） 69.9%となり、既婚者の方の不安感が強いことがわかる。カイ二乗検定の結果 0.1%水準で有意な差であった。

女性では未婚 62.5%、既婚（配偶者あり） 67.8%と男性と同じく既婚者の方がやや強いが、統計的有意差はなかった。

本章第1節において自分自身の犯罪被害不安感について分析した（図Ⅲ-3-3参照）ところ、男女ともに婚姻状況による違いはみられなかった。しかし、家族についての不安感でいうと、男性は既婚者の不安感が強く、女性はあまり違いがないという結果となった。

(4)性別・年齢別・婚姻状況別にみた同居家族犯罪被害の不安感

婚姻状況と年齢とがそれぞれ独立した要因として同居家族の犯罪被害の不安感に影響を及ぼしていることも考えられる。そこで、性別かつ年齢別かつ婚姻状況別に同居家族の犯罪被害の不安感の有無を分析することとした。表Ⅲ-3-9はその結果を示したものである。ただし、40歳以上では未婚者が極端に少なくなり、分析に耐えられないため、集計対象から除外してある。

同居家族が犯罪被害にあう不安感が「ある」という回答比率をみていく。

男性 20 代では、未婚 52.4%、既婚（配偶者あり）61.9%と、既婚者の方が強いが、統計的有意差はない。

男性 30 代では、未婚 48.6%、既婚（配偶者あり）76.0%と 27.4 ポイントの差である。カイ二乗検定の結果 1 %水準で有意な差であった。

女性 20 代では、未婚 62.2%、既婚（配偶者あり）74.0%であった。統計的有意差はなかったが、11.8 ポイントの差で既婚者の方の不安感が強い。

女性 30 代では、未婚 76.5%、既婚（配偶者あり）74.8%となっており、ほとんど差はない。統計的有意差もなかった。30 代の女性は未婚既婚にかかわらず、同居家族の犯罪被害の不安感が強いという結果となった。すなわち、犯罪被害の不安感の強さを生殖家族の有無に還元できないということであり、興味深い知見と言えよう。

表Ⅲ-3-9 性別・年齢別・婚姻状況別にみた同居家族犯罪被害の不安感（%）

			ある	ない	合計	人数(人)
男性	20～29 歳	未婚	52.4	47.6	100.0	103
		既婚（配偶者あり）	61.9	38.1	100.0	42
	30～39 歳	未婚	48.6	51.4	100.0	37
		既婚（配偶者あり）	76.0	24.0	100.0	96
女性	20～29 歳	未婚	62.2	37.8	100.0	90
		既婚（配偶者あり）	74.0	26.0	100.0	50
	30～39 歳	未婚	76.5	23.5	100.0	17
		既婚（配偶者あり）	74.8	25.2	100.0	131

男性 20 代 n.s. 男性 30 代 $p < .01$ 女性 20 代 n.s. 女性 30 代 n.s.

(5) 自身の不安感と同居家族の不安感

ここでは、第 1 節で分析した自身が犯罪被害にあうという不安感と、同居家族が犯罪被害にあうという不安感の関連をみる。

図Ⅲ-3-6 は、両者の関係を示したものである。自分自身が犯罪被害にあう不安感をもっている人は、その 94.9%が同居家族についても不安感をもっている。同居家族については不安感はないという回答者は 5.1%と少数である。

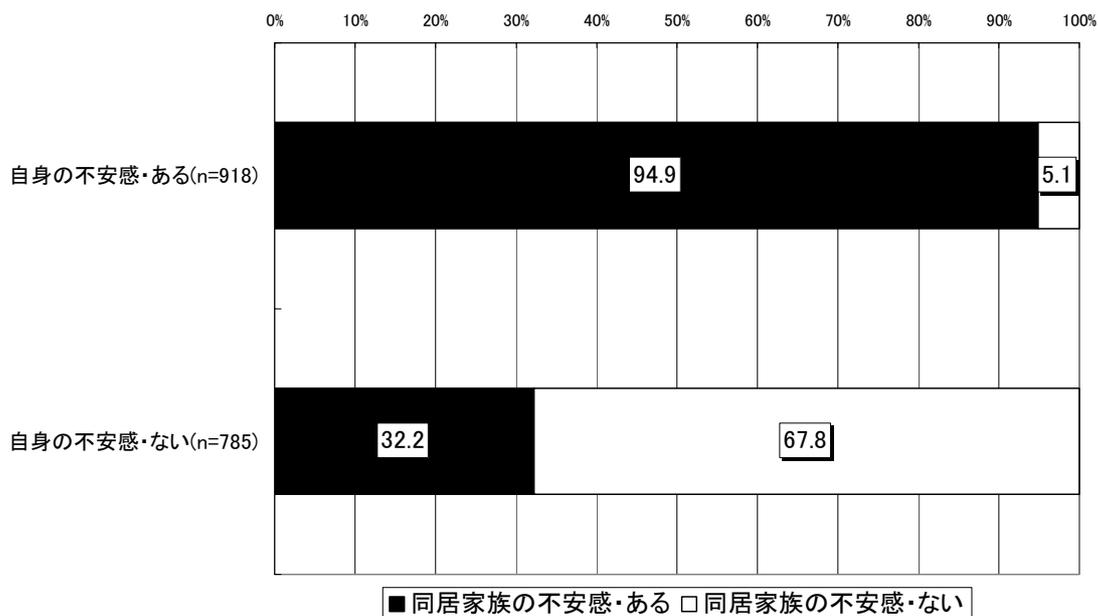
自分自身については不安感はない、という回答者であっても、その 32.2%は同居家族については不安感があるとしている。すなわち、自分は大丈夫と思っている人の 3 割は、家族については不安と回答しているのである。

男女別に集計してもほぼ同様の傾向である。数値のみを紹介する。男性では自分につい

ては不安はない人の 35.4%が同居家族についての不安感はあると回答しており、女性では 28.9%であった。

自分についても不安感があるという人は、男性では 94.8%が同居家族についても不安感があるとし、女性では 95.0%であった。図Ⅲ-3-6 に関しては、0.1%水準で有意な差であった。男女別にクロス集計しても、男女それぞれ 0.1%水準で有意差がみられた。

図Ⅲ-3-6 自身の不安感と同居家族の不安感



$p < .001$

3. 夜の一人歩きの不安感

調査票の間9で、「あなたは夜11時を過ぎてから、住んでいる地域を1人で歩いているとき、犯罪にあう不安をどの程度感じていますか。」とたずねた。回答は、「非常に不安を感じる」「ある程度不安を感じる」「あまり不安を感じない」「全く不安を感じない」の4つと、「わからない」の5つの選択肢を提示した。

(1) 性別にみた夜の一人歩きの不安感

間9においては、男性 0.6% (5人)、女性 1.2% (11人)、全体では 0.9% (16人) が無回答であった。以下、これらを欠損値とし、集計対象から除外して分析していく。

表Ⅲ-3-10は、性別に夜の一人歩きの不安感の回答結果を表したものである。「非常に不安を感じる」という回答をみると、男性 6.0%、女性 14.1%となっている。「ある程度不安を感じる」という回答では、男性 34.4%、女性 46.7%となっている。

男性では4割が不安を感じ、女性では6割が不安を感じている。女性の方が不安感が強く、カイ二乗検定の結果、0.1%水準で有意な差がみられた。

表Ⅲ-3-10 性別にみた夜の一人歩きの不安感 (%)

	非常に不安を感じる	ある程度不安を感じる	あまり不安を感じない	全く不安を感じない	分からない	合計
男性(n=855)	6.0	34.4	37.1	13.1	9.5	100.0
女性(n=911)	14.1	46.7	19.4	4.9	14.9	100.0
全体(n=1,766)	10.1	40.7	28.0	8.9	12.3	100.0

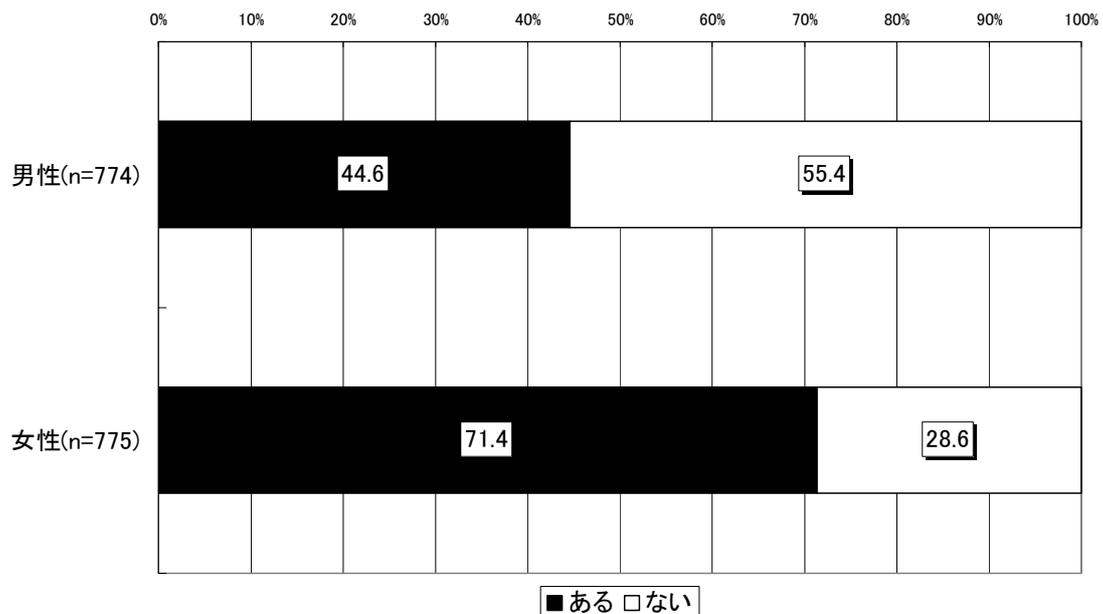
$p < .001$

ここでの設問は、第1節で参照した島田(2004)における設問と類似の設問であるため、再度比較検討したい。JGSS調査ではリスク知覚あり群が男性45%、女性58% ($p < .01$)、ICVS調査では男性16%、女性29%、科警研調査では男性28%、女性44%となっている。

設問文のワーディングと選択肢の提示の仕方が異なるため単純な比較はできないが、本調査結果では、JGSS調査とほぼ同水準の数値となった。

図Ⅲ-3-7は、問9の選択肢から「わからない」という回答を除外し、さらに「非常に不安を感じる」「ある程度不安を感じる」の二つを統合して不安感が「ある」群とし、「あまり不安を感じない」「全く不安を感じない」の二つを統合して不安感が「ない」群として集計した結果である。

図Ⅲ-3-7 性別にみた夜の一人歩きの不安感



$p < .001$

上記の手続きで集計すると、男性の44.6%、女性の71.4%に不安感があるということになる。夜の一人歩きに関しては、女性の方が不安感が強いと言える。カイ二乗検定の結果、0.1%水準で有意な差がみられた。

(2)性別・年齢別にみた夜の一人歩きの不安感

表Ⅲ-3-11は、性別・年齢別に夜の一人歩きの不安感を示したものである。「非常に不安を感じる」「ある程度不安を感じる」を統合して不安感が「ある」群とし、「あまり不安を感じない」「全く不安を感じない」を統合して不安感が「ない」群として集計した。

表Ⅲ-3-11 性別・年齢別にみた夜の一人歩きの不安感 (%)

		ある	ない	分からない	合計	人数(人)
男性	20～29歳	31.0	58.7	10.3	100.0	155
	30～39歳	40.6	51.7	7.7	100.0	143
	40～49歳	44.4	47.0	8.6	100.0	151
	50～59歳	41.7	50.3	8.0	100.0	175
	60～69歳	40.3	48.8	10.9	100.0	129
	70歳以上	46.1	41.2	12.7	100.0	102
女性	20～29歳	72.4	18.6	9.0	100.0	145
	30～39歳	61.4	22.2	16.5	100.0	158
	40～49歳	63.6	23.4	13.0	100.0	154
	50～59歳	65.5	24.9	9.6	100.0	177
	60～69歳	53.3	28.9	17.8	100.0	135
	70歳以上	45.8	28.9	25.4	100.0	142

男性 n.s. 女性 $p<.001$

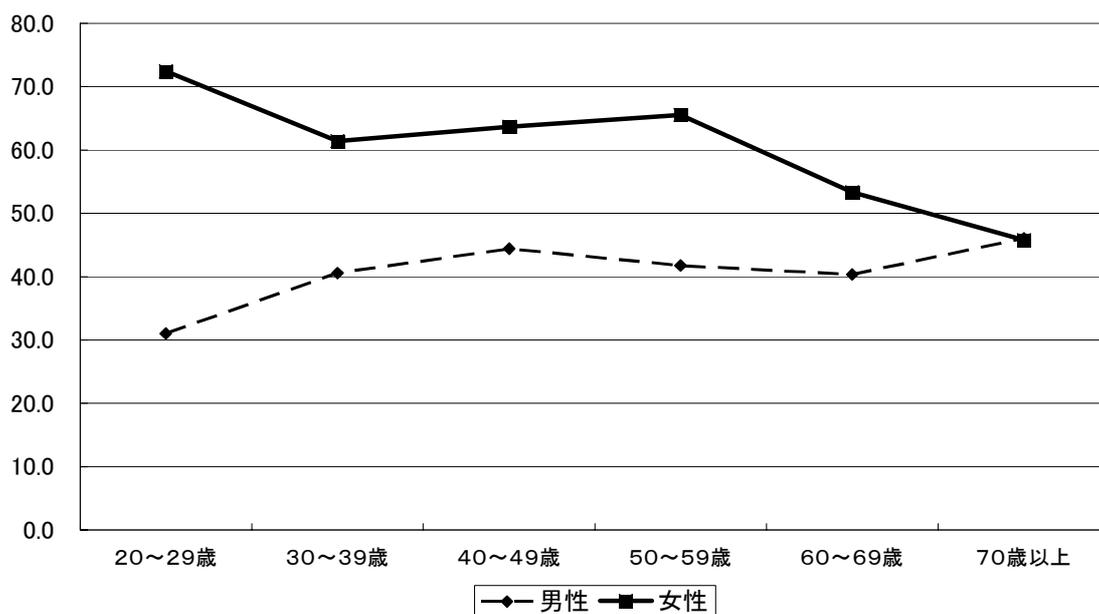
夜の一人歩きの不安感が「ある」という数値をみていく。図Ⅲ-3-8は、不安感が「ある」割合を示したものである。男性では20代31.0%、30代40.6%、40代44.4%、50代41.7%、60代40.3%、70歳以上46.1%となった。20代で最も不安感が弱く、30代以降は4割台でほぼ同一水準で推移する。カイ二乗検定の結果は有意な差はなかった。

女性では20代72.4%、30代61.4%、40代63.6%、50代65.5%、60代53.3%、70歳以上45.8%となった。20代では7割の人が不安感をもち、最も高い。30代から50代まではほぼ6割台で同一水準であり、60代で5割強、70歳以上で4割強と不安感を持つ人の割合が減少していく。カイ二乗検定の結果、0.1%水準で有意な差であり、女性の場合は

男性と異なり、年齢による違いが大きいと言える。

ただし、女性の場合、「わからない」という回答が多く、留意する必要がある。男性ではどの世代でも「わからない」という回答は1割前後であるが、女性では70歳以上の場合、25.4%と4人に一人が「わからない」としている。ついで60代で17.8%、30代で16.5%が「わからない」としており、男性と比べ多く、また世代によってばらつきが大きい。

図Ⅲ-3-8 性別・年齢別にみた夜の一人歩きの不安感（「ある」の割合）



4. 罪種による犯罪被害の不安感の分析

この節では、調査票の問5の a)~p) の設問の回答をもとに、異なる罪種の犯罪被害の不安感について分析していく。設問は以下のとおりである。「あなたは、日頃、あなた自身や同居の家族が犯罪の被害にあうのではという不安をどの程度感じていますか。 a) ~ q) の犯罪それぞれについて、右の回答欄のあてはまる番号に○をつけてください。(アンダーラインは原文ママ)。なお、設問 q) 「その他の不安」は分析対象から除外している。

(1) 罪種による犯罪被害の不安感の分析

それぞれの項目の回答である「非常に不安に」3点、「かなり不安」に2点、「やや不安」に1点、「不安はない」に0点をあたえた。無回答は欠損値とし、集計対象から除外した。

図Ⅲ-3-9はそれぞれの項目の平均点をとり、得点の高い順番に並べかえたものである。

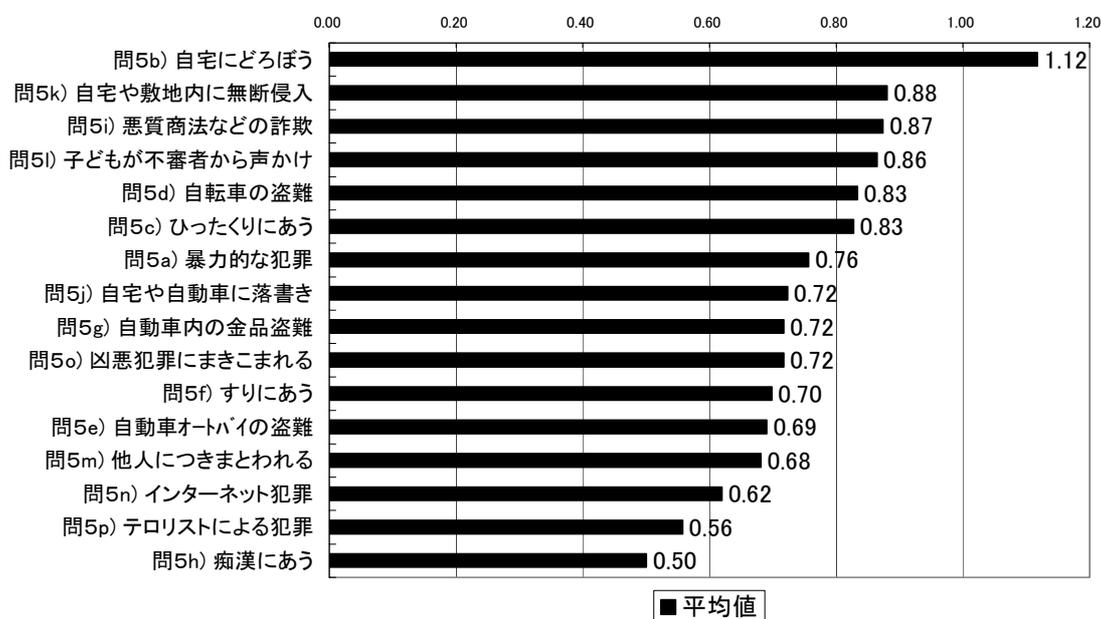
最も不安感が強いのは「自宅にどろぼう（空き巣など）に入られる不安」の1.12であった。この得点は、自宅にどろぼうに入られる不安感の平均は「かなり不安」と「やや不安」

の間であり、そして「やや不安」というよりも若干強い不安感を人びとが抱いているということを示す。

ついで2番目に不安感が強い罪種は「自宅や敷地内に無断で侵入される不安」というもので0.88であった。「やや不安」というよりも若干弱い不安感を人びとは抱いているということである。上位1, 2位は密接に関連した犯罪である。すなわち、自宅への侵入盗に対する不安感が最も強い、ということである。

第3に不安感が強かったのは「悪質商法などの詐欺犯罪にあう不安」の0.87、第4に強かったのは「子どもが不審者に声をかけられたり、追いかけられたりする不安」の0.86であった。これら第2位から第4位の3つの罪種については、ほぼ同水準の不安感とみてよいであろう。

図Ⅲ-3-9 犯罪被害の不安感



註) 上図における標本数は以下のとおりである。問5 a) 暴力的な犯罪(n=1703)、問5 b) 自宅にどろぼう(n=1742)、問5 c) ひったくりにあう(n=1716)、問5 d) 自転車の盗難(n=1701)、問5 e) 自動車オートバイの盗難(n=1686)、問5 f) すりにあう(n=1703)、問5 g) 自動車内の金品盗難(n=1698)、問5 h) 痴漢にあう(n=1694)、問5 i) 悪質商法などの詐欺(n=1716)、問5 j) 自宅や自動車に落書き(n=1707)、問5 k) 自宅や敷地内に無断侵入(n=1718)、問5 l) 子どもが不審者から声かけ(n=1683)、問5 m) 他人につきまとわれる(n=1700)、問5 n) インターネット犯罪(n=1704)、問5 o) 凶悪犯罪にまきこまれる(n=1701)、問5 p) テロリストによる犯罪(n=1708)

(2) 性別にみた犯罪被害の不安感

表Ⅲ-3-12 は、前項で扱った罪種を異にする犯罪被害の不安感を、性別にみたものである。男女それぞれに平均値をとり、2群の平均の差の検定(t検定)を行った。

男女で違いがみられる罪種をあげていく。

「ひったくりにあう不安」「すりにあう不安」「痴漢にあう不安」「人につきまとわれたり、のぞかれたりする不安」の4つは、女性の方が不安感が強く、0.1%水準で有意な差であった。「痴漢」と「つきまとい、のぞき」は被害者が女性であることが大半であろうから、当然と言えば当然の結果であろう。また、「ひったくり」「すり」といった、路上における犯罪においても女性の方が不安感が強く、注目すべき結果である。

表Ⅲ-3-12 性別にみた犯罪被害の不安感

	男性平均値	女性平均値		人数 (男性)	人数 (女性)
問5 a) 暴力的な犯罪	0.72	0.79	*	826	877
問5 b) 自宅にどろぼう	1.05	1.18	**	840	902
問5 c) ひったくりにあう	0.70	0.94	***	829	887
問5 d) 自転車の盗難	0.84	0.82		821	880
問5 e) 自動車オートバイの盗難	0.73	0.65	*	813	873
問5 f) すりにあう	0.62	0.77	***	820	883
問5 g) 自動車内の金品盗難	0.76	0.68	*	818	880
問5 h) 痴漢にあう	0.36	0.63	***	812	882
問5 i) 悪質商法などの詐欺	0.83	0.91		829	887
問5 j) 自宅や自動車に落書き	0.74	0.71		824	883
問5 k) 自宅や敷地内無断侵入	0.83	0.93	*	827	891
問5 l) 子どもが不審者から声	0.78	0.94	**	813	870
問5 m) 他人につきまとわれる	0.57	0.79	***	818	882
問5 n) インターネット犯罪	0.61	0.63		827	877
問5 o) 凶悪犯罪にまきこまれ	0.67	0.76	*	820	881
問5 p) テロリストによる犯罪	0.53	0.58		822	886

* $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

「暴力的な犯罪」「自宅にどろぼう」「自宅や敷地内に無断侵入」「子どもが不審者から声かけ」「凶悪犯罪にまきこまれる」といった罪種においても、女性の方が不安感が強い。

逆に、男性の方が女性よりも不安感が強い罪種は、「自動車オートバイの盗難」「自動車内の金品盗難」の二つである。男性の方が自動車の所持あるいは使用が多いためであろう。

概して女性の方が犯罪被害の不安感が強い傾向にあるが、罪種を細かく検討すると、性的な犯罪のみならず、路上での犯罪においても女性の不安感が強いという結果であった。

(3) 犯罪被害の不安感の因子分析

表Ⅲ-3-13 は、問5のa)～p)について因子分析を行った結果である。主成分分析で因子を抽出し、バリマックス回転を行った結果を示した。その結果、2因子が抽出された。初期の固有値は、第1因子が7.70、第2因子が1.05であった。

第1因子の因子負荷量大きいものをみると、「凶悪犯罪」「つきまとい」「テロリスト」「痴漢」「暴力的な犯罪」「子どもが不審者から声」といったものである。

第2因子の因子負荷量大きいものをみると、「自動車オートバイの盗難」「自動車内の金品盗難」「自宅や自動車に落書き」「自転車の盗難」といったものである。

第1因子、第2因子ともに比較的因子負荷量大きいものとして「すり」「ひったくり」「自宅や敷地内に無断侵入」「自宅にどろぼう」といったものがある。

表Ⅲ-3-13 犯罪被害の不安感の因子分析結果(全体)

回転後の成分行列^a

	成分	
	1	2
Q5_O 問5o) 凶悪犯罪にまきこまれる	.778	.276
Q5_M 問5m) 他人につきまとわれる	.725	.344
Q5_P 問5p) テロリストによる犯罪	.696	.232
Q5_H 問5h) 痴漢にあう	.681	.241
Q5_A 問5a) 暴力的な犯罪	.646	.335
Q5_L 問5l) 子どもが不審者から声かけ	.616	.199
Q5_N 問5n) インターネット犯罪	.610	.272
Q5_I 問5i) 悪質商法などの詐欺	.563	.303
Q5_F 問5f) すりにあう	.553	.530
Q5_C 問5c) ひったくりにあう	.528	.523
Q5_E 問5e) 自動車オートバイの盗難	.204	.815
Q5_G 問5g) 自動車内の金品盗難	.240	.743
Q5_J 問5j) 自宅や自動車に落書き	.319	.680
Q5_D 問5d) 自転車の盗難	.255	.643
Q5_K 問5k) 自宅や敷地内に無断侵入	.482	.565
Q5_B 問5b) 自宅にどろぼう	.475	.542

因子抽出法: 主成分分析

回転法: Kaiser の正規化を伴わないバリマックス法

a. 3回の反復で回転が収束しました。

この結果をみると、第1因子は自身や家族への直接的・身体的な被害に関する不安感であろう。それに対し、第2因子は自動車や自転車、自宅といった、所有物や財産の被害に対する不安感であるように思える。

「すり」「ひったくり」は所有物狙いではあるが、身体的接触の度合いが大きく、2因子ともに因子負荷量が大きくなったものであろう。同様に、「自宅や敷地内に無断侵入」「自宅にどろぼう」といった犯罪も、財産狙いではあるが、自宅への侵入という犯罪は自身や家族への危害につながる不安を抱かせるため、2因子とも因子負荷量が大きくなっているものと思われる。

以上をまとめると、人びとの犯罪被害の不安感は、「自身や家族への直接的・身体的な被害に関する不安感」と「所有物や財産に関する不安感」

の二つに分けられるということになる。ただし、「すり」「ひったくり」「侵入盗」のように、

両者の側面を併せ持つ犯罪被害の不安もあるということである。

なお、男性のみを分析対象として同様の因子分析を行ったところ、1因子のみしか抽出されなかった。

表Ⅲ-3-14 犯罪被害の不安感の因子分析結果(女性)

回転後の成分行列^{a,b}

	成分	
	1	2
Q5_O 問5o) 凶悪犯罪にまきこまれる	.818	.228
Q5_P 問5p) テロリストによる犯罪	.713	.191
Q5_A 問5a) 暴力的な犯罪	.708	.253
Q5_M 問5m) 他人につきまとわれる	.695	.403
Q5_N 問5n) インターネット犯罪	.637	.266
Q5_H 問5h) 痴漢にあう	.624	.373
Q5_I 問5i) 悪質商法などの詐欺	.571	.281
Q5_L 問5l) 子どもが不審者から声かけ	.564	.257
Q5_E 問5e) 自動車オートバイの盗難	.179	.812
Q5_G 問5g) 自動車内の金品盗難	.248	.708
Q5_D 問5d) 自転車の盗難	.167	.695
Q5_F 問5f) すりにあう	.452	.622
Q5_J 問5j) 自宅や自動車に落書き	.364	.606
Q5_C 問5c) ひったくりにあう	.442	.594
Q5_K 問5k) 自宅や敷地内に無断侵入	.458	.570
Q5_B 問5b) 自宅にどろぼう	.434	.549

女性のみを分析対象として因子分析を行ったところ、先ほどの分析結果と同様に2因子が抽出された。表Ⅲ-3-14 にその結果を示した。となると、男性は犯罪被害の不安に関してあまり構造化されていないが、女性は2種類の不安感をもつ、ということになる。

因子抽出法: 主成分分析

回転法: Kaiser の正規化を伴わないバリマックス法

a. 3回の反復で回転が収束しました。

b. Q34 問34 性別 = 女性

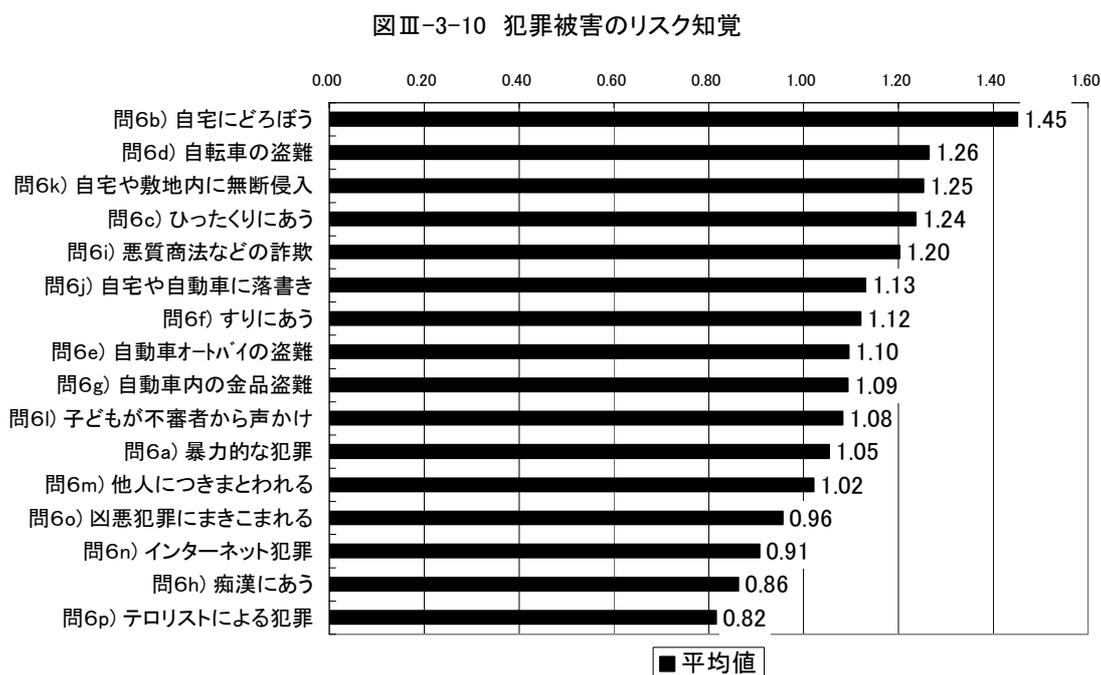
5. 罪種による犯罪被害のリスク知覚の分析

この節では、調査票の問6の a)~p) の設問の回答をもとに、異なる罪種の犯罪被害のリスク知覚について分析していく。設問は以下のとおりである。「あなた自身や同居の家族が今後1年間に、犯罪の被害にあう可能性がどの程度あると思っていますか。a)~q) の犯罪それぞれについて、右の回答欄のあてはまる番号に○をつけてください」。(アンダ

ーラインは原文ママ)。なお、設問 q)「その他の犯罪被害の可能性」は分析対象から除外している。

(1) 罪種による犯罪被害のリスク知覚の分析

それぞれの項目の回答である「かなりある」に3点、「少しある」に2点、「ほとんどない」に1点、「全くない」に0点をあたえた。無回答は欠損値とし、集計対象から除外した。図Ⅲ-3-10はそれぞれの項目の平均値をとり、得点の高い順番に並べかえたものである。



註) 上図における標本数は以下のとおりである。問6 a) 暴力的な犯罪(n=1713)、問6 b) 自宅にどろぼう(n=1742)、問6 c) ひったくりにあう(n=1720)、問6 d) 自転車の盗難(n=1714)、問6 e) 自動車オートバイの盗難(n=1704)、問6 f) すりにあう(n=1720)、問6 g) 自動車内の金品盗難(n=1698)、問6 h) 痴漢にあう(n=1704)、問6 i) 悪質商法などの詐欺(n=1728)、問6 j) 自宅や自動車に落書き(n=1712)、問6 k) 自宅や敷地内に無断侵入(n=1720)、問6 l) 子どもが不審者から声かけ(n=1690)、問6 m) 他人につきまとわれる(n=1711)、問6 n) インターネット犯罪(n=1706)、問6 o) 凶悪犯罪にまきこまれる(n=1708)、問6 p) テロリストによる犯罪(n=1714)。

最も犯罪被害のリスク知覚が高い罪種は、「自宅にどろぼう（空き巣など）に入られる不安」であり、その平均値は1.45であった。この値は、自宅にどろぼうに入られる可能性が、「ほとんどない」と「少しある」の中間程度のリスク知覚であることを意味する。

次いでリスク知覚が高い順に列挙していくと、「自転車の盗難」1.26、「自宅や敷地内に無断侵入」1.25、「ひったくりにあう」1.24、「悪質商法などの詐欺」1.20となる。これらも「ほとんどない」と「少しある」の間ではあるが、やや「ほとんどない」の方に近い

スク知覚である。

リスク知覚が低いのは「凶悪犯罪にまきこまれる」「インターネット犯罪」「痴漢にあう」「テロリストによる」犯罪である。これら4つの犯罪は、「ほとんどない」と「全くない」の間に位置し、「ほとんどない」よりややリスク知覚が低い位置にある。しかしながら、当然のことではあるが、「インターネット犯罪」はインターネットを利用していない人にとってはほとんど無縁である。また、「痴漢にあう」は多くの場合女性が被害者となる犯罪であり、性別や電車・バスの利用頻度による違いが大きいであろう。したがって、ここでの数値から犯罪のリスク知覚に関して結論を出すことは保留すべきであろう。

(2)性別にみた犯罪被害のリスク知覚

表Ⅲ-3-15 は、前項で扱った罪種を異にする犯罪被害のリスク知覚を、性別にみたものである。男女それぞれに平均値をとり、2群の平均の差の検定（*t*検定）を行った。

表Ⅲ-3-15 性別にみた犯罪被害のリスク知覚

	男性平均値	女性平均値		人数 (男性)	人数 (女性)
問6 a) 暴力的な犯罪	1.05	1.06		827	886
問6 b) 自宅にどろぼう	1.40	1.50	**	843	899
問6 c) ひったくりにあう	1.16	1.31	***	830	890
問6 d) 自転車の盗難	1.25	1.28		827	887
問6 e) 自動車オートバイの盗難	1.13	1.06		824	880
問6 f) すりにあう	1.04	1.19	***	827	893
問6 g) 自動車内の金品盗難	1.12	1.07		819	879
問6 h) 痴漢にあう	0.71	1.01	***	819	885
問6 i) 悪質商法などの詐欺	1.14	1.26	**	835	893
問6 j) 自宅や自動車に落書き	1.12	1.14		827	885
問6 k) 自宅や敷地内に無断侵入	1.19	1.31	**	830	890
問6 l) 子どもが不審者から声	1.00	1.16	***	819	871
問6 m) 他人につきまとわれる	0.92	1.11	***	823	888
問6 n) インターネット犯罪	0.90	0.92		827	879
問6 o) 凶悪犯罪にまきこまれる	0.93	0.98		825	883
問6 p) テロリストによる犯罪	0.79	0.84		825	889

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

男女で違いがみられる罪種をあげていく。「ひったくり」「すり」「痴漢」「子どもが不審

者から声」「他人につきまとわれる」の5項目では、0.1%水準で有意な差がみられた。いずれも、女性のリスク知覚が高い。また、「自宅にどろぼう」「悪質商法などの詐欺」「自宅や敷地内に無断侵入」の3項目では、1%水準で有意な差がみられた。これらにおいても、女性の方がリスク知覚が高い。

前節での分析と同様に、性的な犯罪のみならず、路上での犯罪においても女性の方がリスク知覚が高いということが明らかになった。また、犯罪被害の不安感とは異なり、男性の方が有意に高いリスク知覚の罪種はなかった。

(3) 犯罪被害のリスク知覚の因子分析

前節で犯罪被害の不安感について因子分析を行ったが、ここでも同様の分析をリスク知覚に関して行ったところ、1因子しか抽出されなかった。男女にわけて因子分析したところ、男性では2因子が抽出された。表Ⅲ-3-16は、その結果を示したものである。

表Ⅲ-3-16 犯罪被害のリスク知覚の因子分析(男性)

	回転後の成分行列 ^{a,b}	
	1	2
Q6_B 問6b) 自宅にどろぼう	.808	.187
Q6_E 問6e) 自動車オートバイの盗難	.767	.243
Q6_C 問6c) ひったくりにあう	.731	.390
Q6_G 問6g) 自動車内の金品盗難	.727	.281
Q6_J 問6j) 自宅や自動車に落書き	.726	.331
Q6_A 問6a) 暴力的な犯罪	.703	.369
Q6_K 問6k) 自宅や敷地内に無断侵入	.697	.385
Q6_F 問6f) すりにあう	.688	.422
Q6_O 問6o) 凶悪犯罪にまきこまれる	.593	.559
Q6_D 問6d) 自転車の盗難	.539	.380
Q6_I 問6i) 悪質商法などの詐欺	.507	.478
Q6_H 問6h) 痴漢にあう	.194	.799
Q6_M 問6m) 他人につきまとわれる	.394	.751
Q6_L 問6l) 子どもが不審者から声かけ	.245	.748
Q6_N 問6n) インターネット犯罪	.358	.611
Q6_P 問6p) テロリストによる犯罪	.505	.533

因子抽出法: 主成分分析
 回転法: Kaiser の正規化を伴わないバリマックス法

- a. 3 回の反復で回転が収束しました。
- b. Q34 問34 性別 = 男性

初期の固有値は、第1因子が 8.80、第2因子が 1.02 であった。

第1因子の因子負荷量大きい項目をみると、「自宅にどろぼう」「自動車オートバイの盗難」「ひったくり」「自動車内の金品盗難」「自宅や自動車に落書き」「暴力的な犯罪」「自宅や敷地内に無断侵入」といったものである。

第2因子の因子負荷量大きいものをみると、「痴漢」「つきまとい」「子どもが不審者から声かけ」といったものである。これらは、成人男性が被害にあうことを自身があまり想定しない罪種であろう。

以上の結果をみると、第1因子は「自身への犯罪のリスク知覚」因子であり、第2因子は「自身以外の同居家族への犯罪被害のリスク知覚」因子であるように思える。

となると、男性は、自身へのリスク知覚と、自身以外の家族へのリスク知覚の2つの構造をもっていることになる。

それに対し、女性では1因子しか抽出されなかった。

前節での犯罪被害の不安感の因子分析では、女性は「自身や家族への直接的・身体的な被害に関する不安感」と「所有物や財産に関する不安感」の2因子が抽出されたが、男性では1因子しか抽出されなかった。

しかし、犯罪被害のリスク知覚の因子分析では逆に、男性は「自身への犯罪のリスク知覚」と「自身以外の同居家族への犯罪被害のリスク知覚」との2因子が抽出されるが、女性では1因子のみしか抽出されなかった。

以上の結果から、Ferraro (1995) らの先行研究をふまえ、わが国でも精力的に犯罪不安の実証研究をすすめてきた島田・鈴木 (2003a, 2003b)、島田 (2004) の報告でも知見がもたらされているように、犯罪不安と犯罪のリスク知覚の両者は異なる構造を持っているということが明らかになった。

6. まとめ

本章では、犯罪被害の不安感とリスク知覚について分析してきた。

全般的な犯罪被害の不安感においては、おおむね、男性よりも女性の方が不安感が高いという傾向がみられ、これは先行する他の調査研究の知見と一致する。年齢別にみると30代～40代の不安感が高く、これも従来の知見と同様である。ただし、20代では女性の不安感が高く、男性の不安感は低いということが明らかになった。20代では性別によって不安感が異なるのである。婚姻状況による違いはみられなかった。

同居家族が犯罪被害にあう不安感においては、性別による違いはみられなかった。年齢別では、男女ともに20代から30代、40代と不安感が高くなっていき、40代の不安感が最も高く、それ以上の年齢では徐々に低下していく傾向がみられた。40代では約8割の人が不安感があると回答した。婚姻状況別にみると、男性では既婚者は未婚者よりも同居家族の犯罪被害の不安感が高いが、女性では違いはみられなかった。

夜の一人歩きの不安感においては、女性の不安感が男性より高かった。とりわけ、20代の女性の不安感が高く、7割以上が不安感があるとしている。女性では30代から50代まで、ほぼ6割の女性が不安感があるとしており、60代以上になるとやや低下していく傾向がみられた。

罪種による不安感を分析していくと、「自宅にどろぼう（空き巣など）に入られる不安」が最も高かった。平均すると、「やや不安」というよりも強く、「かなり不安」というほどではない、という程度の不安感を人びとが抱いているという知見がえられた。ついで、「自宅や敷地内に無断で侵入される不安」、「悪質商法などの詐欺犯罪にあう不安」、「子どもが

不審者に声をかけられたり、追いかけられたりする不安」が不安感の高い罪種であった。

性別にみていくと、おおむね女性の方が不安感が高いが、とりわけ女性の不安感が高い罪種として、「ひったくり」「すり」「痴漢」「他人につきまとわれる」といった罪種があげられる。性的な犯罪のみならず、路上での犯罪においても女性の不安感が高いということが分かった。

罪種によるリスク知覚について分析したところ、最もリスク知覚が高かったのは、不安感と同様、「自宅にどろぼう（空き巣など）に入られる可能性」であった。平均すると、「ほとんどない」というよりは高く、「少しある」というよりは低い、ちょうど両者の中間くらいのリスク知覚であった。ついでリスク知覚が高い罪種は、「自転車の盗難」「自宅や敷地内に無断侵入」「ひったくり」「悪質商法」といったものであった。

性別にみていくと、おおむね女性の方がリスク知覚が高いが、とりわけ女性のリスク知覚が高い罪種として、「ひったくり」「すり」「痴漢」「子どもが不審者から声かけ」「他人につきまとわれる」といった罪種があげられる。性的な犯罪のみならず、路上での犯罪においても女性のリスク知覚が高いということが分かった。

【文献】

- ・島田貴仁・鈴木護,2003a,「犯罪不安の構造について」,日本犯罪心理学会編『犯罪心理学研究』41
- ・島田貴仁・鈴木護,2003b,「犯罪不安の構造とデモグラフィック要因との関係」,日本行動計量学会第31回大会発表論文抄録集,78-81
- ・島田貴仁,2004,「JGSSによる犯罪リスク知覚と犯罪被害の測定」,日本版 General Social Surveys 研究論文集(3),227-240